

中央新幹線南アルプストンネル山梨工区
山梨・静岡県境付近の調査及び工事の計画について

令和5年1月

東海旅客鉄道株式会社

目次

- (1) 県境付近における断層帯調査の進め方 1
- (2) 先進坑掘削の進め方..... 2 9

(1) 県境付近における断層帯調査の進め方

1) 断層帯調査の概要

- ・山梨・静岡県境付近の断層帯を上向きに掘削する際に山梨県側に流出するトンネル湧水について静岡県との対話が続くなか、流域市町から地域の皆さまのご懸念を解消すべく技術的なデータに基づく議論を求める声が高まっています。
- ・県境付近の断層帯については、平成24年度に東俣付近からの斜めボーリングを行いました(図1、図2)。調査は東俣付近から開始し、県境から静岡県側に約300mの地点まで実施しましたが、調査の終点から県境までの区間ではボーリング調査を行っておらず、この区間まで破碎質な地質が連続している可能性は排除できないと考えています。

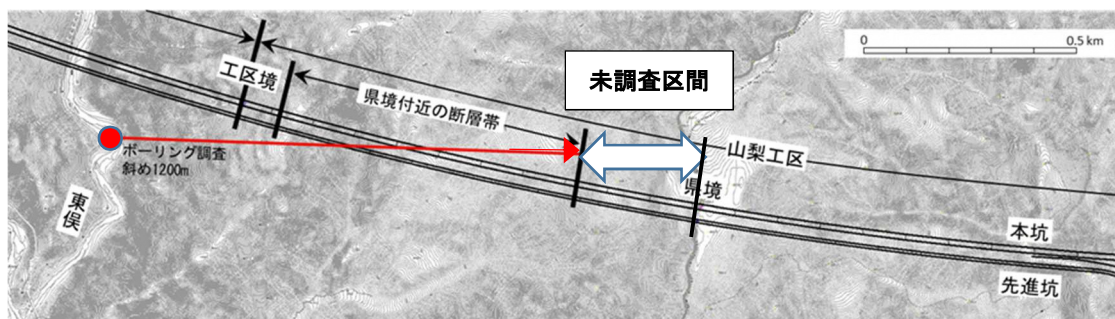


図1 平面図及び斜めボーリングの実施位置

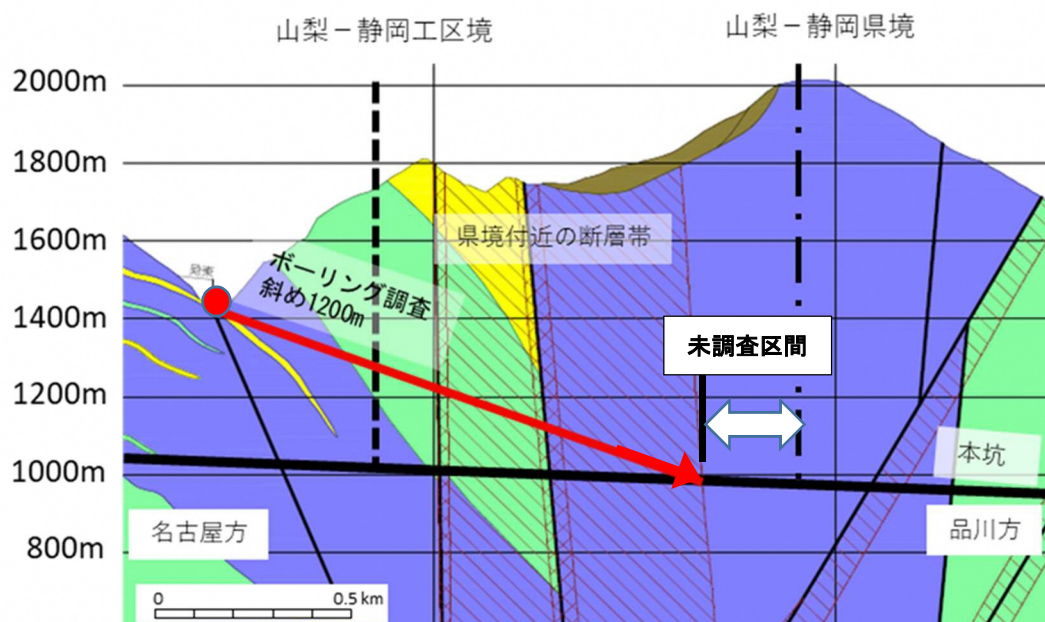


図2 地質縦断図及び斜めボーリングの実施位置

- ・トンネル掘削にあたっては、水資源利用へのリスクを想定し、工事前及び工事中におけるモニタリングの結果を踏まえ、対応してまいります。一方で、継続的に技術的なデータを得て検討を進め、トンネル湧水に関する不確実性を低減し、その結果を公表することも、地域の皆さまのご懸念を解消するためには重要と考えています。

- ・断層帯調査および先進坑掘削ステップを以下の手順で進めてまいります。また、概要を図 3 に示します。

① 山梨県内の地質、地下水の調査を目的に、県境付近に向けた高速長尺先進ボーリングを実施します。地質の状況によりボーリングの削孔延長は影響を受けませんが、1, 200 m程度の延長を掘削した事例もあり、ボーリングが県境に達する時点において、静岡県側から山梨県側へ流出する湧水と同量の水を静岡県側に戻す方法が実施可能となった場合には、県境を越えて未調査の約300 mについてもボーリング調査を進め、結果を公表することが、地域の皆さまのご懸念を解消するために望ましいと考えます。

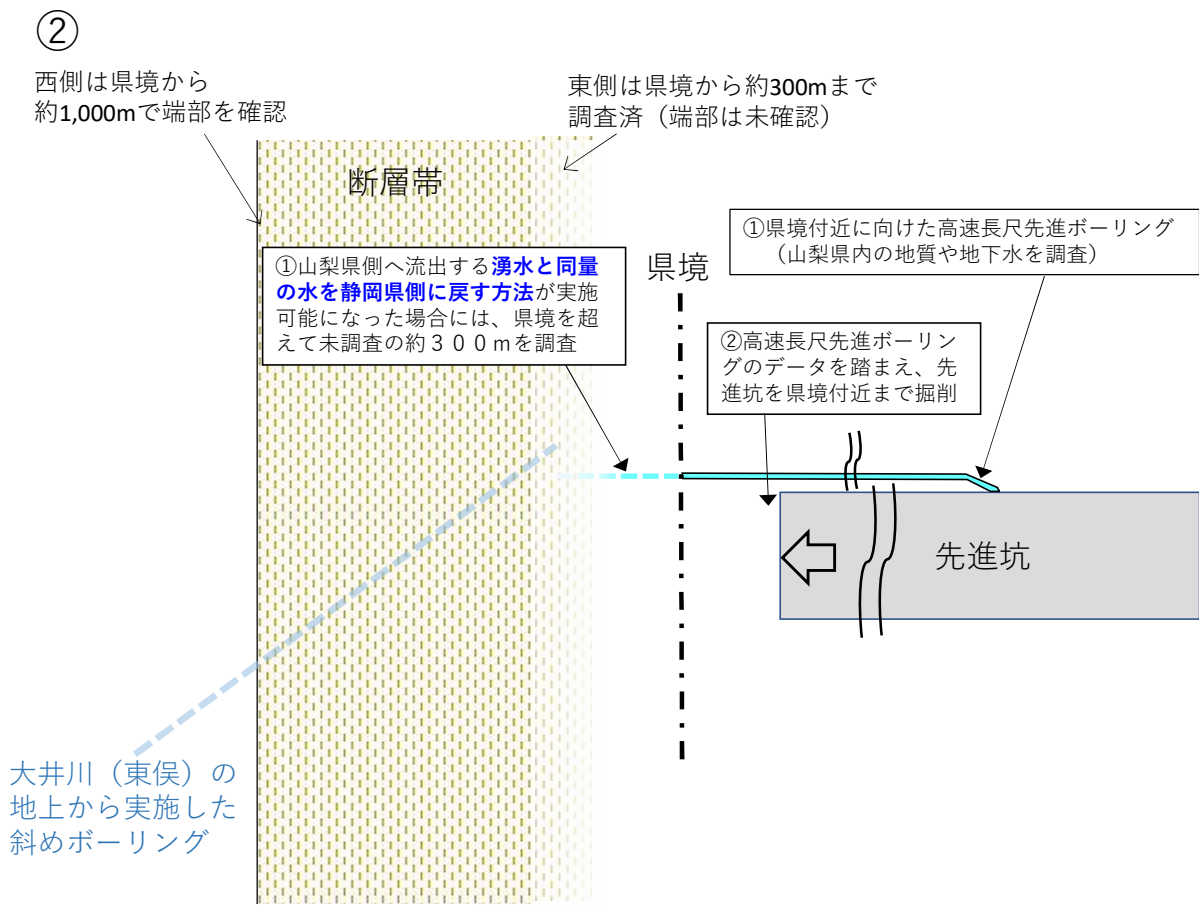
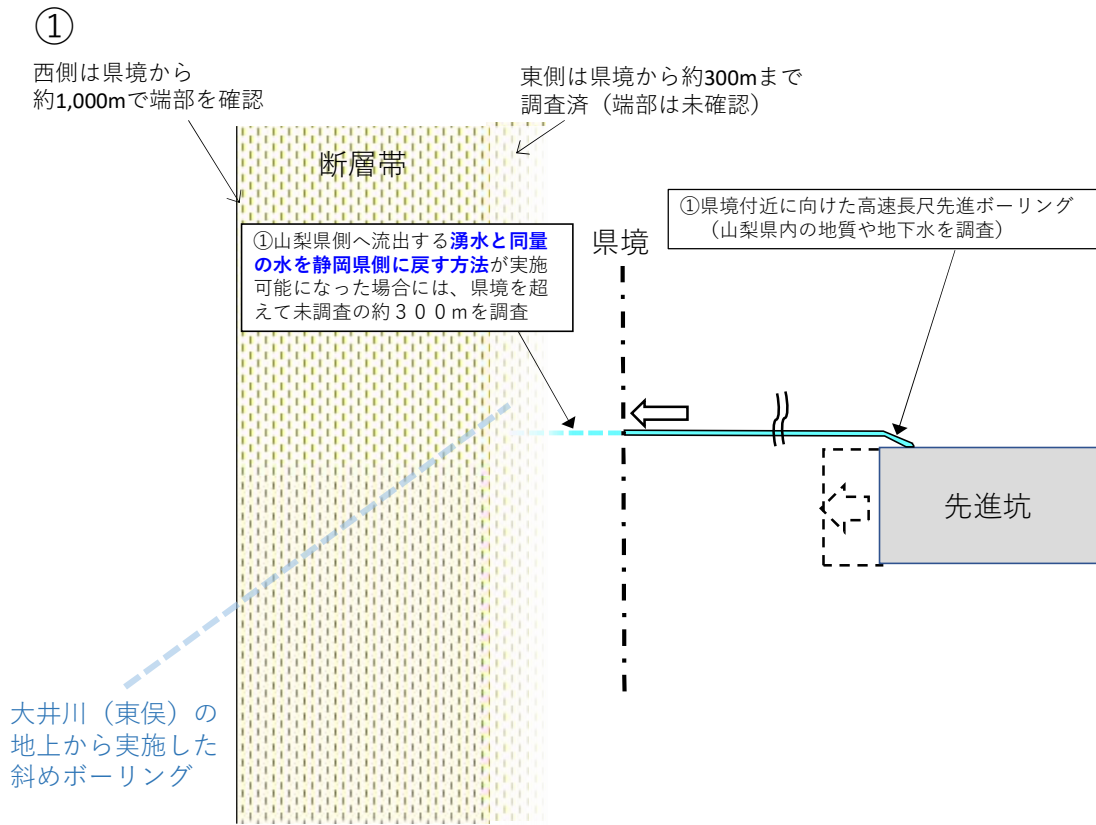
調査中・調査完了後とも湧水は量を測定のうちでボーリング孔の口元（孔口）から流し、静岡県内の湧水については同量の水を静岡県側に戻します。

② 上記の山梨県内の調査データを踏まえながら、山梨県内の先進坑を県境付近まで掘削していきます。

③ 県境付近から断層帯の調査を目的とした高速長尺先進ボーリングを、県境を越えて静岡県内で実施します。県境を越えたボーリングについては、第10回地質構造・水資源専門部会（令和4年12月4日）でお示ししていましたが、今回その内容についても具体的に計画いたしました。

トンネルの掘削を計画している区間に並行し、近い箇所では静岡県内の地質や地下水の状況を連続的に把握し、技術的なデータを取得することが可能となります。また、湧水量の多い箇所や地質が変化する箇所等では、施工可能な延長も考慮したうえでコアボーリングを実施します。

調査中の湧水は量を測定したうえで孔口から流し、同量の水を静岡県側に戻します。調査が完了した後は湧水の流出を防ぐため孔口付近で止水します。



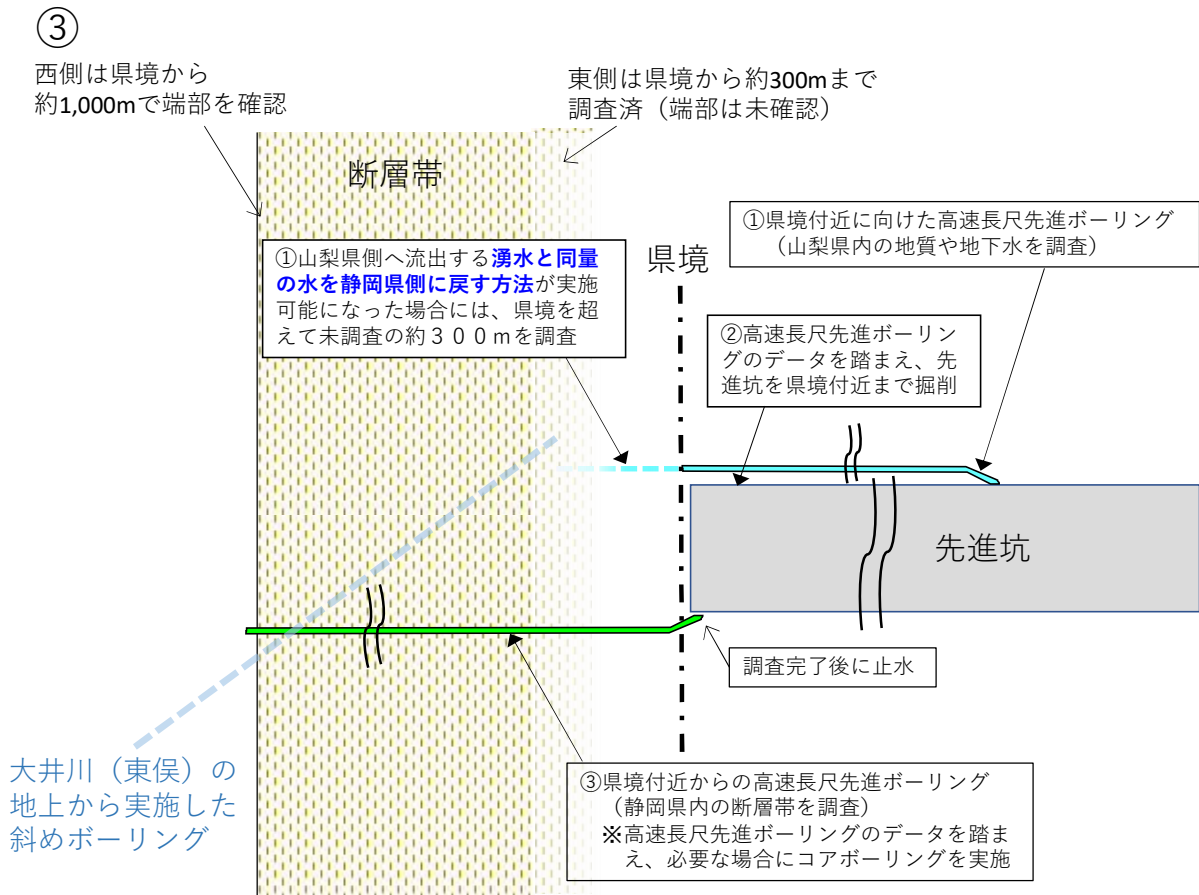


図 3 断層帯調査の概要（平面図）

2) 高速長尺先進ボーリング

ア. 概要

- ・南アルプストンネルでは、第9回地質構造・水資源専門部会（令和4年10月31日）でご説明したように、地質や湧水に関する不確実性に対応するため、トンネル掘削に先立ち、高速長尺先進ボーリングによる調査をトンネル全延長において実施して、トンネル前方の地山や湧水の状況を慎重に確認しながら掘削する体制を組み、**事業を進めています。**
- ・高速長尺先進ボーリングによる調査では、トンネル切羽前方の500～1,000m程度の区間を**早くかつ**精度よく確認することで、地山の悪い箇所や調査中の湧水量が変化する箇所などを予め把握することが可能です。
- ・**高速長尺先進ボーリングは、トンネル施工の確実な見通しを得るために切羽前方の地質情報を常に把握することを主な目的として様々な役割を持つものではありますが¹、今回の調査は県境付近の断層帯の地質及び湧水に関する情報を把握し、地域の皆さまのご懸念を解消していくために実施するものです。**
- ・調査・計画の段階において、可能な場合には地上からのボーリングを実施いたしますが、山梨・静岡県境付近については土被りが800m以上もあるうえ機材運搬に必要となるアクセスが困難であることから、山梨県側から掘削した先進坑を利用した高速長尺先進ボーリングおよびその後のコアボーリングがそれに代わる手段となります。
- ・また、地上からのボーリングとは異なり、高速長尺先進ボーリングは、トンネルを掘削する区間に沿った地質及び湧水の状況を、水平方向に連続的に把握できるという利点があります。（図 4）

¹ 「長大山岳トンネル施工を見据えた長尺先進ボーリング技術の開発」 2011年1月第16回地下空間シンポジウム「世界に挑む日本の技術～成長戦略と地下技術との関わり～」より

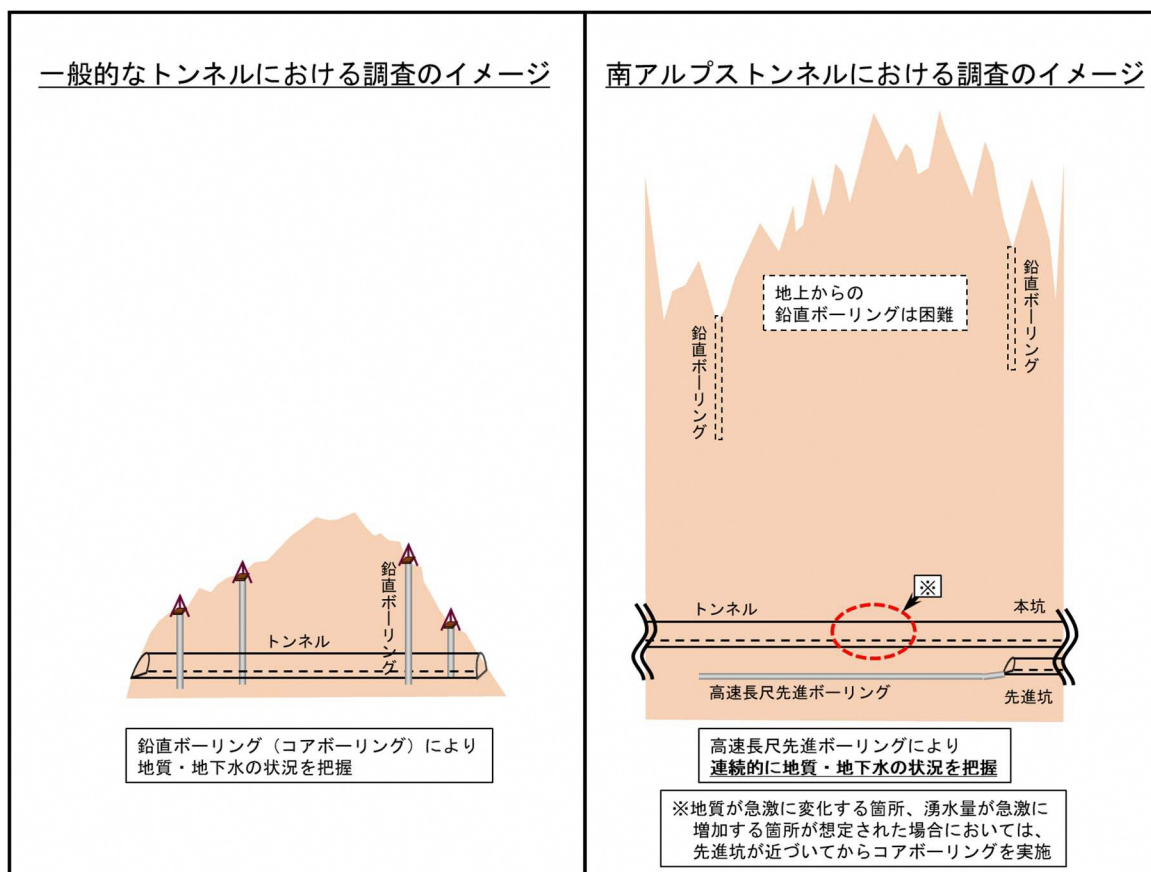


図 4 ボーリング調査のイメージ

- ・ 第 9 回地質構造・水資源専門部会（令和 4 年 1 0 月 3 1 日）で委員からご要請がありました山梨県内の工区における湧水量に関する資料として、南アルプストンネル山梨工区の広河原斜坑において実施した高速長尺先進ボーリング中の孔口湧水量を図 5 に示します。
- ・ 高速長尺先進ボーリングによる調査では、湧水量のほか、削孔中に排出される岩石片（スライム）を採取して地質を把握します。広河原斜坑の高速長尺先進ボーリング調査において採取したスライムの代表例を図 6 に示します。採取したスライムを観察することにより、ボーリング②の削孔深度 8 7 0 ～ 8 8 0 m が緑色岩と粘板岩の地質の境界であることやボーリング⑤の削孔深度 3 3 5 ～ 4 3 5 m においては、粘板岩緑色岩互層より徐々に粘板岩主体となることを把握することができました。また、これらの地質の境界付近において湧水量が増加していることが図 5 より分かります。

- このように、場所ごとの地質及び湧水の情報事前に複合的に捉えることに加え、マシンデータより得られる情報をトンネル掘削計画に逐次フィードバックすることで、広河原斜坑を安全にかつ環境に配慮して掘り進めることができました。

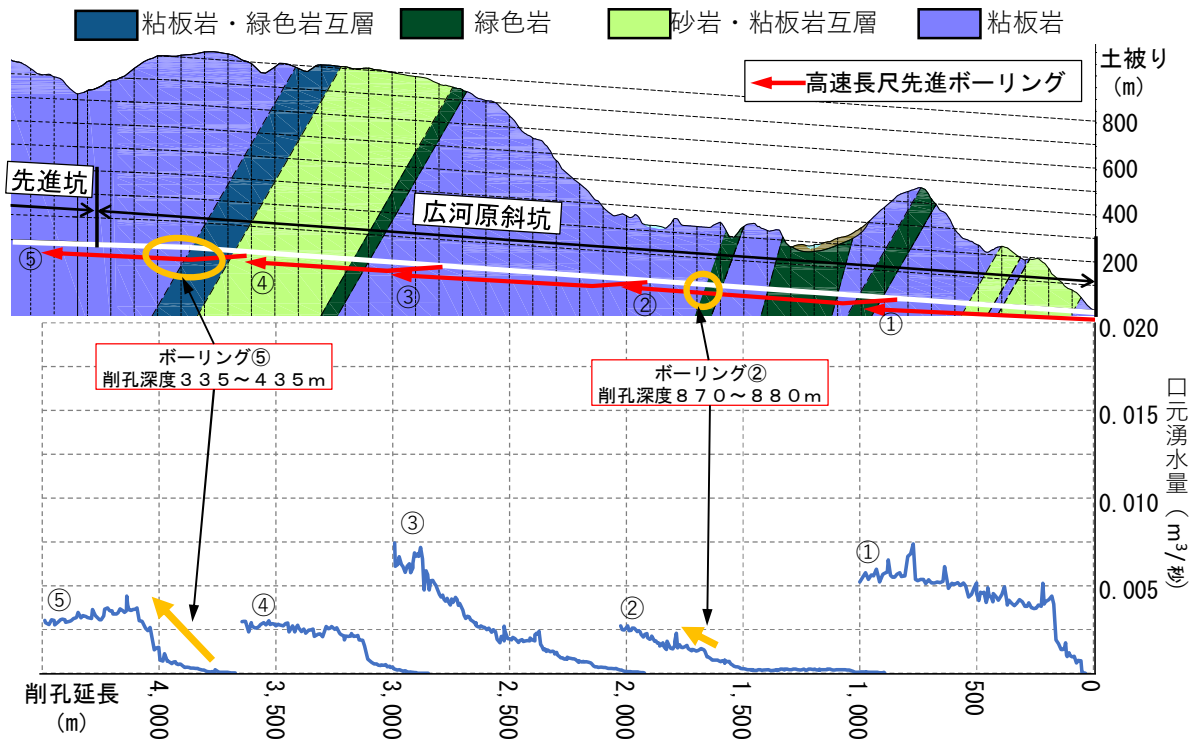


図 5 広河原斜坑における高速長尺先進ボーリングの孔口湧水量



ボーリング②

削孔深度	870～875m
岩種	緑色岩（玄武岩質）
記事	粒径はφ3mm～5mmが主 最大粒径はφ7mm



ボーリング②

削孔深度	875～880m
岩種	粘板岩
記事	粒径はφ2mm～3mmが主 最大粒径はφ4mm



ボーリング⑤

削孔深度	335～340m
岩種	粘板岩緑色岩互層
記事	粒径はφ3mm～6mmが主 最大粒径はφ12mm



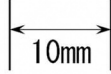
ボーリング⑤

削孔深度	345～350m
岩種	粘板岩緑色岩互層
記事	粒径はφ3mm～6mmが主 最大粒径はφ12mm



ボーリング⑤

削孔深度	355～360m
岩種	粘板岩
記事	粒径はφ3mm～6mmが主 最大粒径はφ10mm



ボーリング⑤

削孔深度	375～380m
岩種	粘板岩
記事	粒径はφ3mm～6mmが主 最大粒径はφ10mm



ボーリング⑤

削孔深度	400～405m
岩種	粘板岩
記事	粒径はφ1mm～4mmが主 最大粒径はφ10mm



ボーリング⑤

削孔深度	430～435m
岩種	粘板岩
記事	粒径はφ2mm～5mmが主 最大粒径はφ8mm

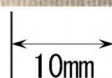


図 6 広河原斜坑における高速長尺先進ボーリングのスライムの代表例

イ. 調査内容

- ・高速長尺先進ボーリングの削孔計画を図 7 に示します。孔口より深度 500 m から 700 m 程度の区間までは直径 200 mm で削孔を行い、当該区間に保護管を設置したのち、以降の区間は直径 120 mm で削孔を行います。なお、削孔および保護管を設置する延長は地質の状況等に応じて変更します。
- ・高速長尺先進ボーリングの削孔断面積は約 0.01~0.10 m² であり、本坑の約 100 m² や先進坑の約 35 m² に比べて小さな断面です (図 8)。

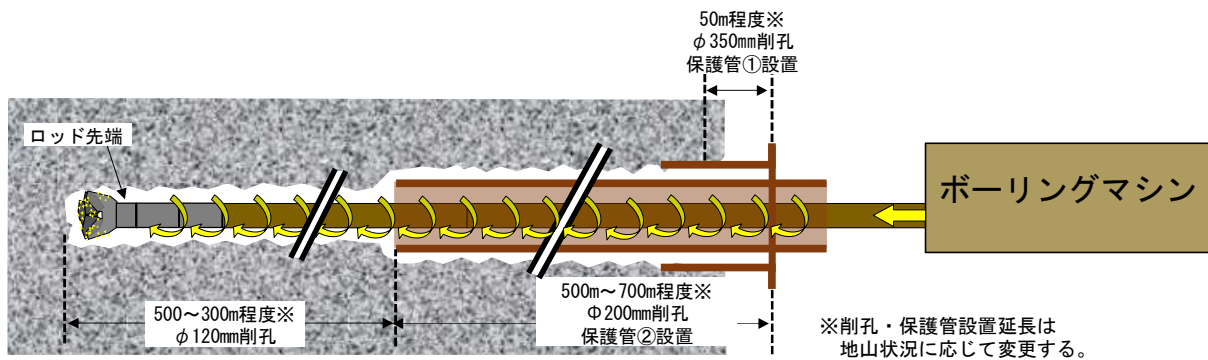


図 7 高速長尺先進ボーリング削孔計画

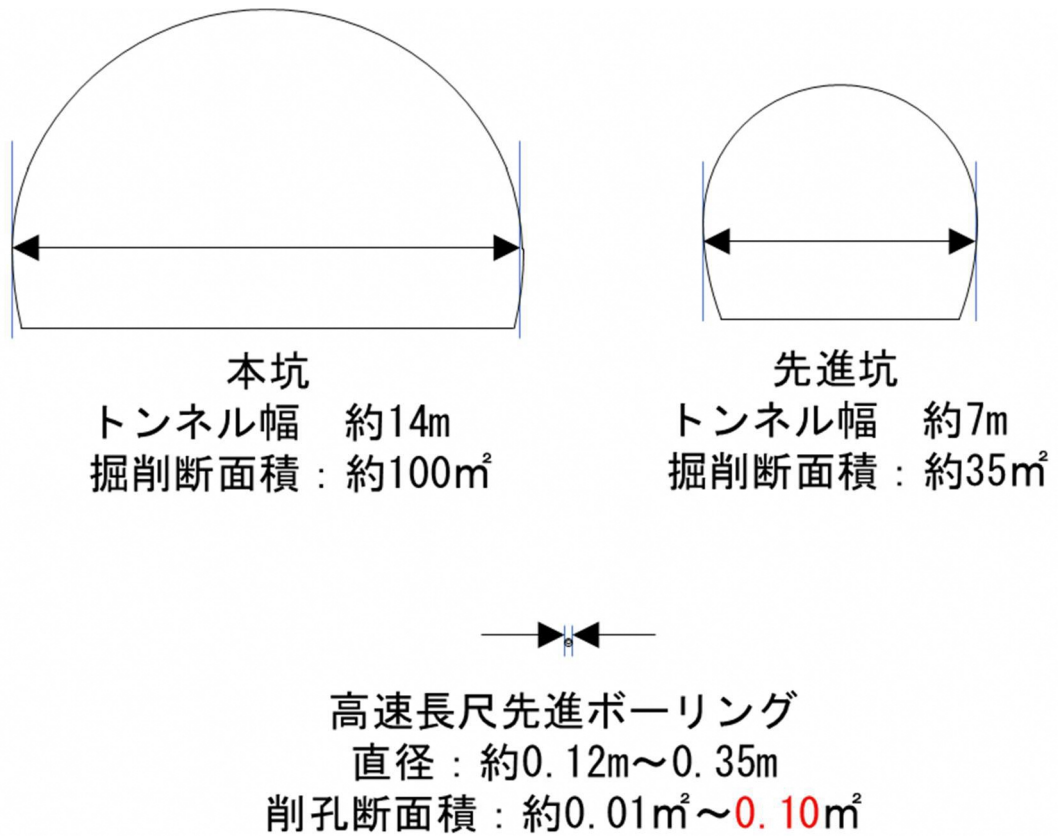


図 8 トンネルと高速長尺先進ボーリングの断面積

- 高速長尺先進ボーリングにおいて調査する項目や高速長尺先進ボーリングの調査によってわかることと、不確実性の低減等に向けたデータの活用方法を表 1 に示します。表 1 に赤字で記載した内容は第 10 回地質構造・水資源専門部会（令和 4 年 12 月 4 日）でお示しした調査項目に追加したものです。

表 1 高速長尺先進ボーリング調査の項目等

調査項目		測定方法	測定頻度	調査によってわかること	活用方法	
地質・地山	岩石片（スライム）の観察による確認	・ 孔口より排出されるスライムを容器で採取	・ 約 5 m に 1 回	・ 地質分布の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既往地質図との比較（場所毎の地盤区分の確認） ・ 掘削計画（湧水対策等）への反映 ・ 他の調査結果と組み合わせて概略的な地下水流向の推察 	
	掘削速度	<ul style="list-style-type: none"> ・ マシン制御盤にて測定（ロッド回転トルク、回転数、マシン推進力は掘削エネルギー係数等に換算） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 削孔中常時 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 割れ目発達状況等、同一岩盤内での地山の良し悪しの把握 		
	ロッド回転トルク					
	ロッド回転数					
	マシン推進力					
	ボーリングのコントロール状況の記録	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボーリングオペレーターの観測手簿確認 ・ コントロール軌跡図確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手簿は 1 日 2 回程度記録し、定期的に確認 ・ 軌跡は常時記録し、定期的に確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他の調査結果と組み合わせて概略的な地層の走向・傾斜の把握 		
コアチューブによるコア採取	※表 2 のコア観察、物理特性・力学特性の項目で記載	（状況により実施）	※表 2 のコア観察、物理特性・力学特性の項目で記載	※同左		
湧水	孔口湧水量（削孔中）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 容器法による測定 ・ 電磁流量計による変動傾向の把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 容器法は 1 日 2 回を基本。湧水量が大きく変化する箇所やビット交換時なども追加で実施 ・ 電磁流量計は常時記録 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 湧水の増加傾向から湧水量の多い区間の把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地表水との連続性が疑われる箇所を推定 ・ 掘削時の影響に関するリスク分析、対策 	
	孔口湧水量（削孔完了時）	・ タービン式流量計	・ 常時			
	孔口湧水の水質（水温、pH、電気伝導度）	<ul style="list-style-type: none"> ・ デジタル水温計、pH 計測器、導電率計による計測 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 容器法による湧水量の測定と同時に実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 掘削の進捗に伴う変化の傾向を、湧水量とも関連付けて確認 		
	湧水圧測定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 孔口で止水し調査区間平均湧水圧を測定 ・ 孔内での湧水圧測定への挑戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 孔口での止水測定は、孔口部、削孔段取り替え時で実施 ・ 孔内測定は深度 100 m 付近で挑戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査区間の平均透水係数を算出 ・ 場所毎の圧力変化から地下水の流動傾向を概略的に確認 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 透水係数の状況確認 ・ 地下水移動量の概略を把握
	湧水の化学的な成分分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ 溶存イオン 8 項目、酸素・水素安定同位体比、不活性ガス（SF₆）、トリチウム等 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 湧水圧測定時に採水 ・ 湧水量測定で変化がある時は追加実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ シュティブダイアグラム作成、涵養標高・涵養年代の算出 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 湧水の起源について考察 ・ 掘削時の影響に関するリスク分析、対策

- 掘削エネルギー係数による地山評価の例を図 9 に示します。

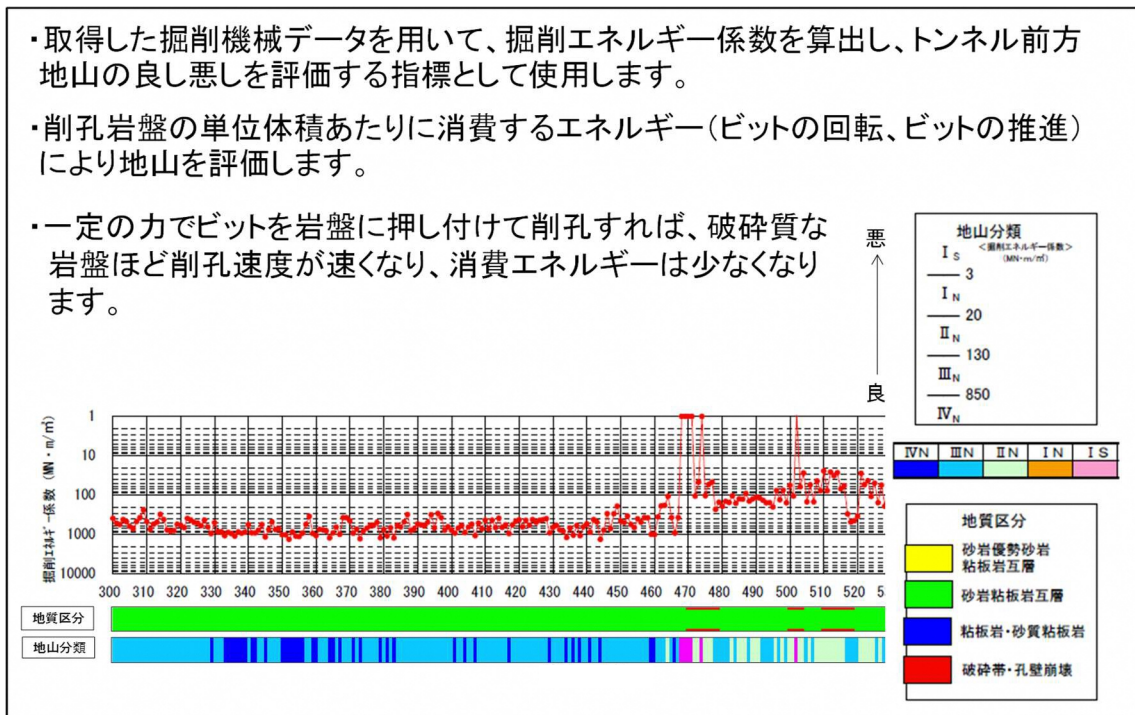


図 9 掘削エネルギー係数による地山評価の例

- 実際の調査事例として、過去に大井川（東俣）から山梨県側に向けて行った高速長尺先進ボーリングの調査結果を図 10 に示します。上のグラフでは掘削エネルギー係数の推移などにより地質の状態が推察でき、下のグラフでは孔口湧水量の推移がわかります。

地質の状態の推察にあたっては、ボーリング削孔時の記録（例：回転停止等 緑字で表記）などについても、この情報だけで確定的に扱うことができるものではありませんが、参考として定期的に確認することとしています。

- 先進坑を県境付近まで掘削のうえで高速長尺先進ボーリングやコアボーリングを実施することにより、トンネルを掘削する区間に沿った地質や地下水の状況を、水平方向に連続的に把握し技術的なデータを得ることができるため、トンネル湧水に関する不確実性を低減し、地域の皆さまのご懸念の解消につなげていくことができると考えます。

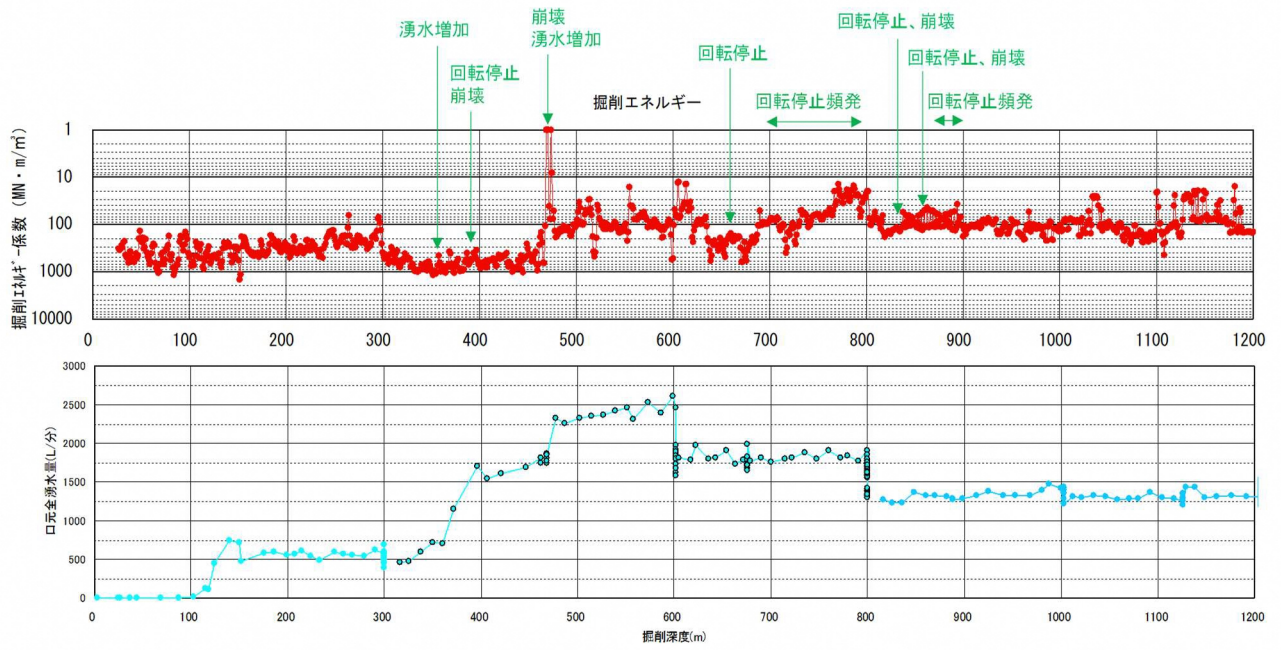


図 10 高速長尺先進ボーリングの調査結果

- ・また、新技術への挑戦として、コアチューブによるコア採取など、高速長尺先進ボーリングでは難しいコアの採取も試みる計画です。(写真 1)



写真 1 コア採取ツール（コアチューブ：参考）

- ・湧水については、孔口での湧水量測定に併せて、水温、pH、電気伝導度も測定する計画とします。また、孔口で湧水圧の測定を行うとともに、湧水の化学的な成分分析を実施します。
- ・掘削速度、ロッド回転トルク、コントロールボーリング記録等
掘削データの新たな活用方法の挑戦として、概略的な地層の走向・傾斜の推察に取り組めます。具体的には先端ビットが地山内の地層の走向や傾斜により、わずかに先行して着岩することで、そこが回転支点となり、ボーリング孔がある一定方向へ動こう（上下左右）とする動きが見られます。これを修正するためにコントロールボーリングを行ないますが、この特性を活かし、他の調査結果と組み合わせることで概略的な地層の走向や傾斜等を推察します。また、削孔時のデータから地質の脆い箇所や送水量・排水量のバランスなどを総合的に見ていくことで、地質の変化や脆い箇所などを精度よく把握し、地質・地山に関する場所ごとの情報を更新していきます。
- ・湧水量、水質の測定
湧水の観点では、孔口湧水量を測定し増加量や増加している区間を確認するとともに、孔口湧水の水温やpH、電気伝導度などの測定を併せて行い、調査時における湧水変化を量と質をもって連続的に把握することで、地表水との連続性が疑われる箇所を推定し、さらには、湧水の化学的な成分分析等を行うことで掘削時の影響に

関するリスク分析、対策を検討します。図 1 1 は広河原斜坑における高速長尺先進ボーリングの湧水量のグラフです。湧水量だけではなく、湧水の増加量や増加している区間などがわかります。図 1 2 は湧水の水質（電気伝導度）を計測した結果です。この広河原斜坑のデータでは湧水量がやや増加している箇所を含め、水質が急激に変化している箇所はありませんが、仮にそうした箇所があれば地表の水との連続性が疑われるため、重点を置いて管理する必要がある箇所となります。

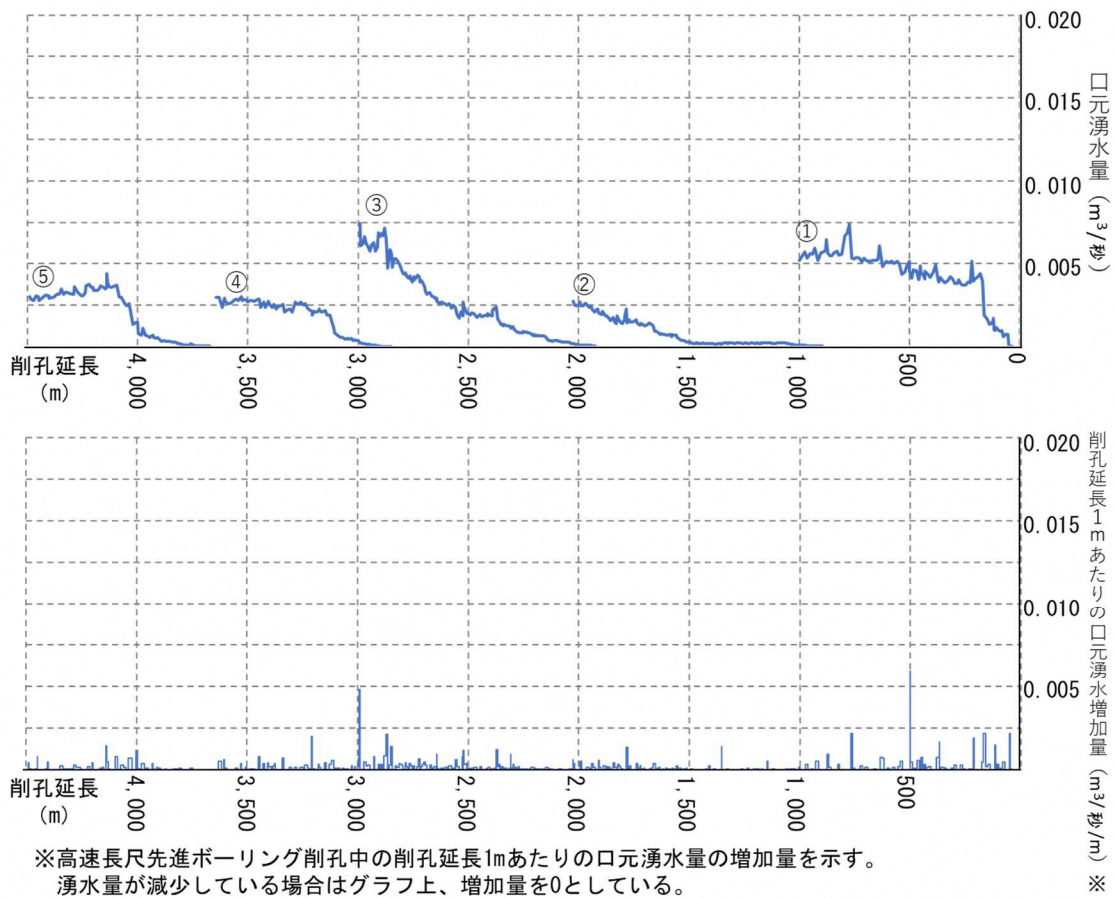


図 1 1 広河原斜坑における高速長尺先進ボーリングの湧水量計測結果

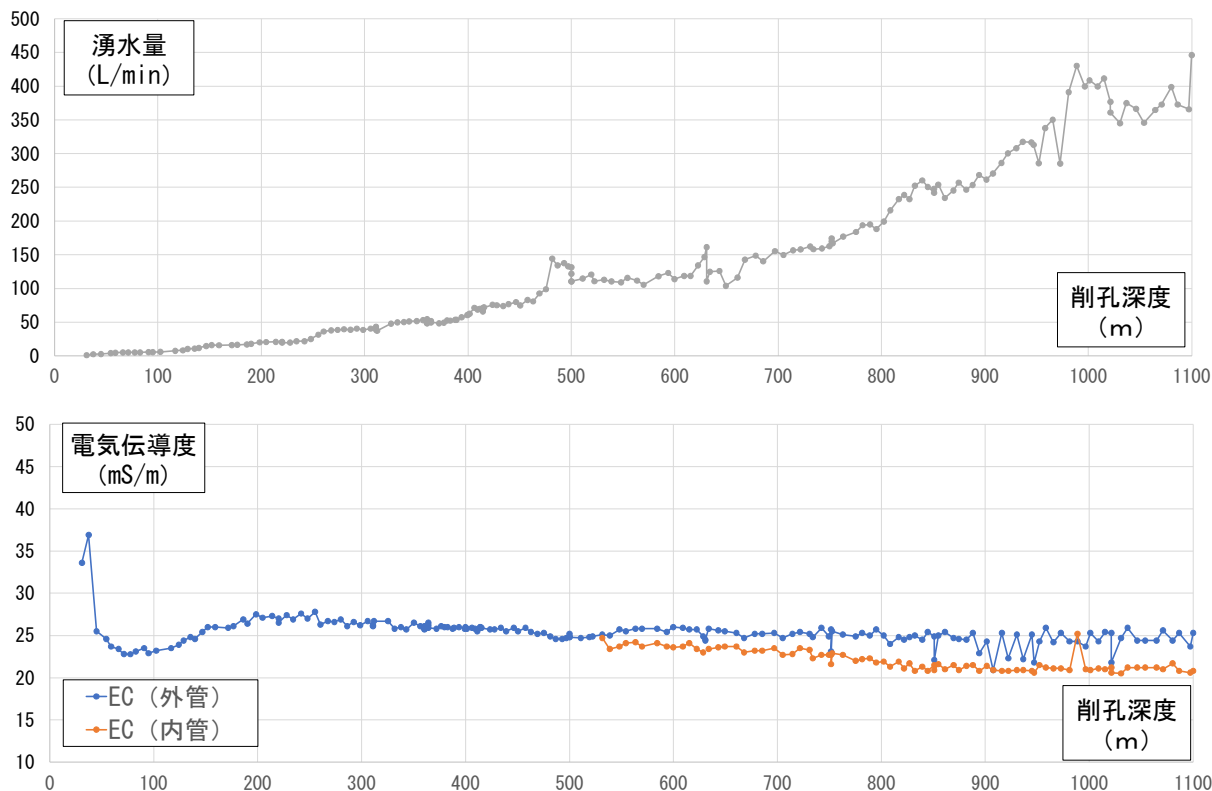


図 1 2 広河原斜坑の高速長尺先進ボーリングの湧水の水質計測結果

- ・また、これまで行っている水収支解析においては、既往のボーリング調査における湧水圧試験の結果や有効間隙率試験の結果を参照しつつ、河川流量の実測値と予測値との再現性の検証において最も再現性が良かった透水係数、有効間隙率の組合せからこれらを設定していました。今回、高速長尺先進ボーリング時に実施する湧水圧測定の結果等から現地での平均的な透水係数を把握します。(水収支解析のイメージを図 1 3 に示します。)

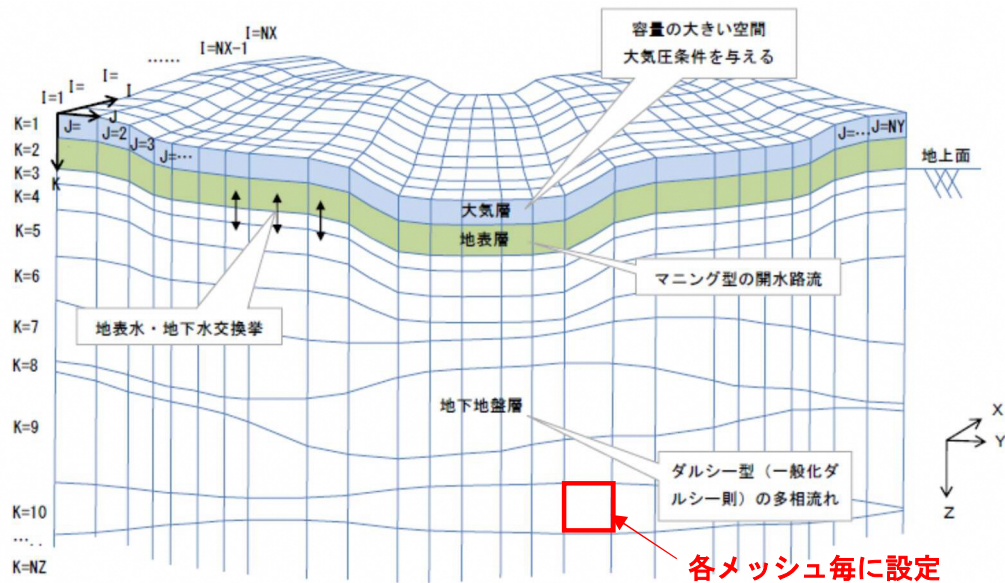


図 1 3 水収支解析モデル（静岡市モデル）

- 断層帯については、一つの大きな幅をもった区間として設定していました。高速長尺先進ボーリングで地質分布の確認を行い、路線に沿って断層帯の延長や、断層帯と堅岩部の分布状況を把握してまいります（図 1 4）。

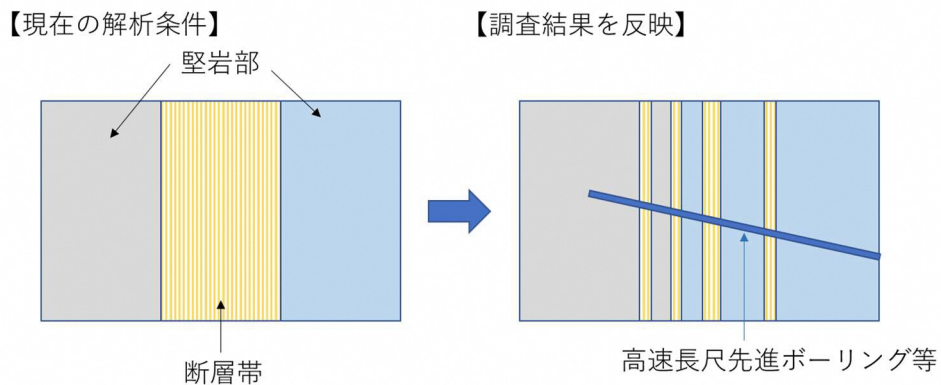


図 1 4 調査による地盤区分の把握のイメージ

- 地質・地山と湧水の基礎的なデータを個々に見るのではなく総合的に考察・分析・評価することで、トンネル掘削に関する影響について不確実性の低減を可能な限り図るよう、調査結果をまとめていきます。
- 調査の結果は専門部会で報告し、地域の皆さまのご懸念の解消につなげてまいります。

3) コアボーリング

- ・高速長尺先進ボーリングによる調査で、地質の脆い区間や湧水量が急激に増える区間などが確認された場合は、コアボーリングにより詳細を確認します。
- ・コアボーリングで計画する調査項目やコアボーリングの調査によってわかることと、不確実性の低減等に向けたデータの活用方法を表 2 にまとめます。

表 2 コアボーリングの調査項目

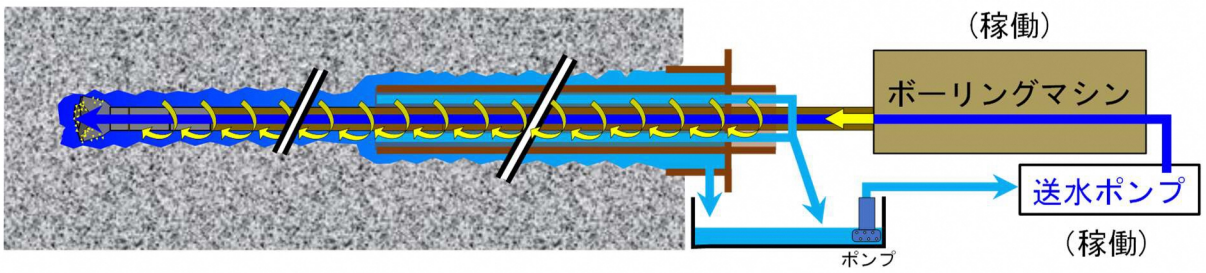
	調査項目	測定方法	測定頻度	調査によってわかること	活用方法
地質・地山	コア観察	<ul style="list-style-type: none"> 採取したコアの観察（岩種、風化、割れ目状態、変質等） （断層粘土の挟在、褶曲構造） コア採取に関するデータの整理（採取率、最大コア長、RQD等） 	<ul style="list-style-type: none"> 全試料延長 	<ul style="list-style-type: none"> 地質等変化箇所など特定箇所における地質性状の詳細把握 岩盤の割れ目の幅や間隔の把握 地質の脆い区間の規模（幅等）を把握 	<ul style="list-style-type: none"> 既往地質図との比較（場所毎の地盤区分の確認） 地質弱部の評価
	物理特性・力学特性	<ul style="list-style-type: none"> 採取コアを整形し各種試験を実施（物理試験） 密度、含水比、有効間隙率、超音波速度（力学試験） 一軸圧縮試験、三軸圧縮試験（必要な場合） 	<ul style="list-style-type: none"> 地質の脆い区間や湧水量が変化した箇所を実施 	<ul style="list-style-type: none"> 岩石が持つ強度や特性の把握 	<ul style="list-style-type: none"> 有効間隙率の状況確認 地質弱部の評価
湧水	孔口湧水量（削孔中）	<ul style="list-style-type: none"> 容器法による測定 電磁流量計による変動傾向の把握 	<ul style="list-style-type: none"> 容器法は1日2回を基本。湧水量が大きく変化する箇所やビット交換時なども追加で実施 電磁流量計は常時記録 	<ul style="list-style-type: none"> 湧水の増加傾向から湧水量の多い区間の把握 	<ul style="list-style-type: none"> 地表水との連続性が疑われる箇所を推定 掘削時の影響に関するリスク分析、対策
	孔口湧水量（削孔完了時）	<ul style="list-style-type: none"> タービン式流量計 	<ul style="list-style-type: none"> 常時 		
	孔口湧水の水質（水温、pH、電気伝導度）	<ul style="list-style-type: none"> デジタル水温計、pH計測器、導電率計による計測 	<ul style="list-style-type: none"> 容器法による湧水量の測定と同時に実施 	<ul style="list-style-type: none"> 掘削の進捗に伴う変化の傾向を湧水量とも関連付けて確認 	
	湧水圧測定	<ul style="list-style-type: none"> 孔口で止水し調査区間平均湧水圧を測定 特定箇所における孔内湧水圧測定 	<ul style="list-style-type: none"> 湧水量が変化した箇所とその前後で実施 孔内湧水圧測定は高速長尺先進ボーリングの結果を踏まえ実施 	<ul style="list-style-type: none"> 特定の調査区間における透水係数を算出 場所毎の圧力変化から地下水の流動傾向を確認 	<ul style="list-style-type: none"> 特定の調査区間における透水係数の確認 地下水移動量の把握
	湧水の化学的な成分分析	<ul style="list-style-type: none"> 溶存イオン8項目、酸素・水素安定同位体比、不活性ガス（SF6）、トリチウム等 	<ul style="list-style-type: none"> 湧水圧測定時に採水 湧水量測定で変化がある時は追加実施 	<ul style="list-style-type: none"> シュティフダイヤグラム作成、涵養標高・涵養年代の算出 	<ul style="list-style-type: none"> 特定の調査区間における湧水の起源について考察 掘削時の影響に関するリスク分析、対策

- コアボーリングでは、取得したコアサンプルによる物理特性・力学特性の確認や、ボーリング孔を利用した現場透水試験等によって現地での水理定数のデータ（透水係数、有効間隙率）を直接把握することができるため、不確実性の低減につながる可以考虑しています。
- 一方、コアボーリングは高速長尺先進ボーリングのようなコントロール機能を有していないことなどから長距離の削孔は難しく、削孔深度が深くなるにつれ、左右に大きく曲がったり、下向きに大きく垂れ下がるなど、削孔精度に大きな課題があるため、この点も考慮のうえで実施を検討いたします。
- 調査結果の報告は、高速長尺先進ボーリングと同様に行います。詳細は「 6）調査状況の報告」でご説明します。

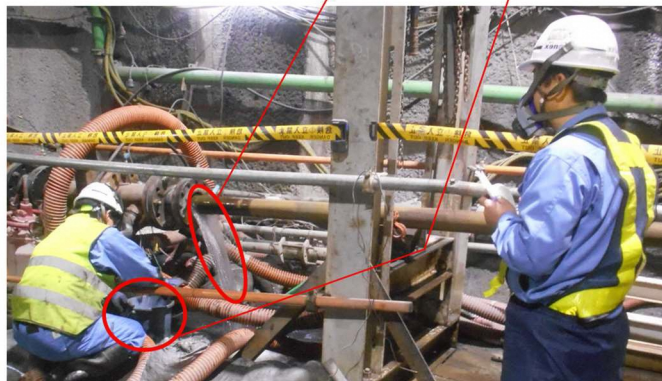
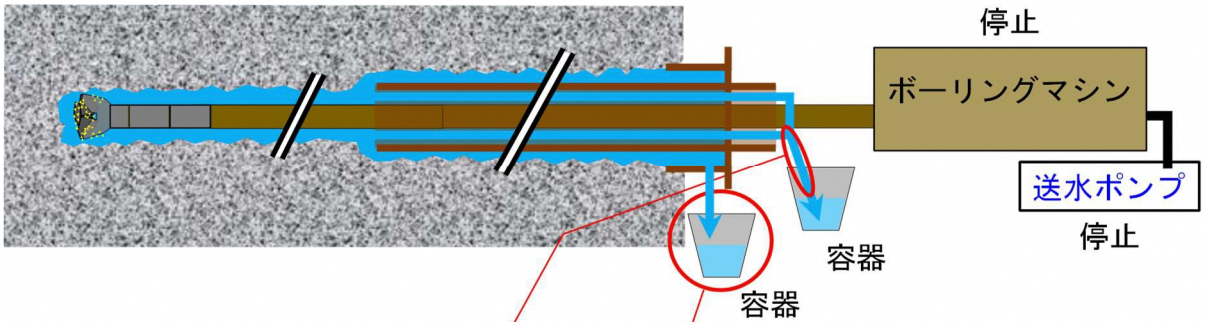
4) ボーリングにおける湧水量の測定方法

- ボーリングにおける湧水量の具体的な測定方法は、図 15 のとおりです。
- 湧水量は、1 日 2 回の容器による計測に加え、電磁流量計による常時計測を行うことにより、湧水の状況を常時把握できるようにします。
- ボーリングの削孔作業時は、送水ポンプにより送水しながら削孔するため、削孔のために送水した水とボーリング孔内に流入する湧水が、あわせてボーリング孔口から出てくるため、孔口において湧水のみを測定することはできません。
- そこで、ボーリングの削孔期間中は **1 日 2 回**、削孔作業を一時中断のうえ送水ポンプからの送水を停止し、孔口からの水量が落ち着いたのちにそれを湧水として容器にて測定します。
- また、上述の容器による測定に加え、削孔用に送水する水（削孔水）と孔口より出る湧水（削孔水と地下水が混じった状態）をそれぞれ電磁流量計により計測します。削孔水と孔口より出る湧水では孔内でのリターン時間によるタイムラグが生じるものの、差を取ることで湧水量を算出することが可能です。これにより湧水量の変動傾向を常時把握します。
- このように、ボーリングの削孔期間中、湧水量の測定は 1 日 2 回の容器による計測を基本としつつ、電磁流量計による湧水量の変動傾向を常時把握することで、湧水量の急激な変化の有無を合わせて把握していきます。
- ボーリングによる削孔が完了し、ボーリングマシンなど削孔に必要な機器を撤去した後は、流量計を設置のうえ湧水を常時計測します。
- 高速長尺先進ボーリング（ノンコアボーリング）、コアボーリングに関わらず、上述の測定方法により、湧水量を測定します。

ボーリング削孔中の水の流れ



ボーリング削孔中の容器による湧水量計測 (削孔を一時停止し、約1時間後) 停止



容器による計測 (写真)

ボーリング削孔中の電磁流量計による湧水量計測

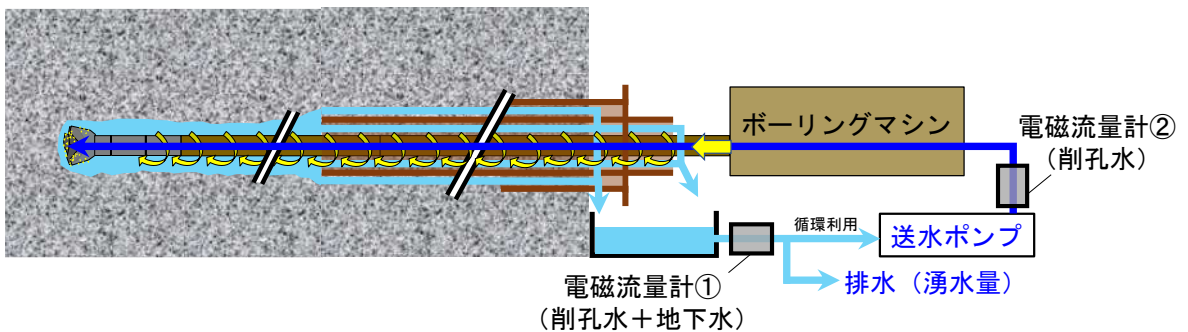


図 15 ボーリングにおける湧水量の測定方法 (高速長尺先進ボーリングの場合)

5) ボーリングにおける湧水への対応

【山梨県内において県境付近に向けて実施する高速長尺先進ボーリング】

○調査中

- ・山梨県内を削孔中に生じる湧水について、調査中は削孔に必要な水をポンプで循環させる必要があることから、孔口から流します。
- ・調査中は継続的に湧水量を測定します。県境に近い区間（県境より100mを目安とし、掘削の結果により修正）では特に地質の変化や湧水量の変化に注意しながら、慎重に削孔します。湧水量が管理値（10mあたり $0.05\text{ m}^3/\text{秒}$ ）²を超える場合は、削孔を中断し対応を検討します。

○調査完了後

- ・調査完了後の山梨県内の湧水については、その後に実施する先進坑掘削の安全を考慮し、その量を継続的に測定のうちで孔口から流します。

【上記のボーリングについて、県境を越えて実施する場合】

- ・ボーリングが県境に達する時点において、皆様からのご懸念を受け止め、静岡県側から山梨県側へ流出する湧水と同量の水を静岡県側に戻す方法が実施可能となった場合には、未調査の約300mの区間まで県境を越えて削孔することを考えています。湧水に戻す方法や時期については、資料1「中央新幹線南アルプストンネル工事における県外流出量を大井川に戻す方策等について」でご提示している方法等を参考に議論を進めてまいります。これまでのボーリング時の湧水量の実績から判断すれば突発湧水の発生時を含め、戻すことは可能と考えています。
- ・静岡県内の湧水と同量の水を戻すにあたり、実際にはボーリング孔口で測定する湧水は山梨県内と静岡県内の両方で発生する水が混ざって出てきます。山梨県内の湧水と静岡県内の湧水の区分については、削孔時に測定される孔口湧水量の削孔延長あたり増加量に着目し、山梨・静岡各県区間の湧水増加量の累積量の比により按分する方法などが考えられ、図16にそのイメージを示します。

² 平成31年3月13日「静岡県中央新幹線環境保全連絡会議地質構造・水資源専門部会」において提示したものの、および国土交通省「リニア中央新幹線静岡工区有識者会議」で提示した「大井川水資源利用への影響の回避・低減に向けた取組み」に記載した管理値。

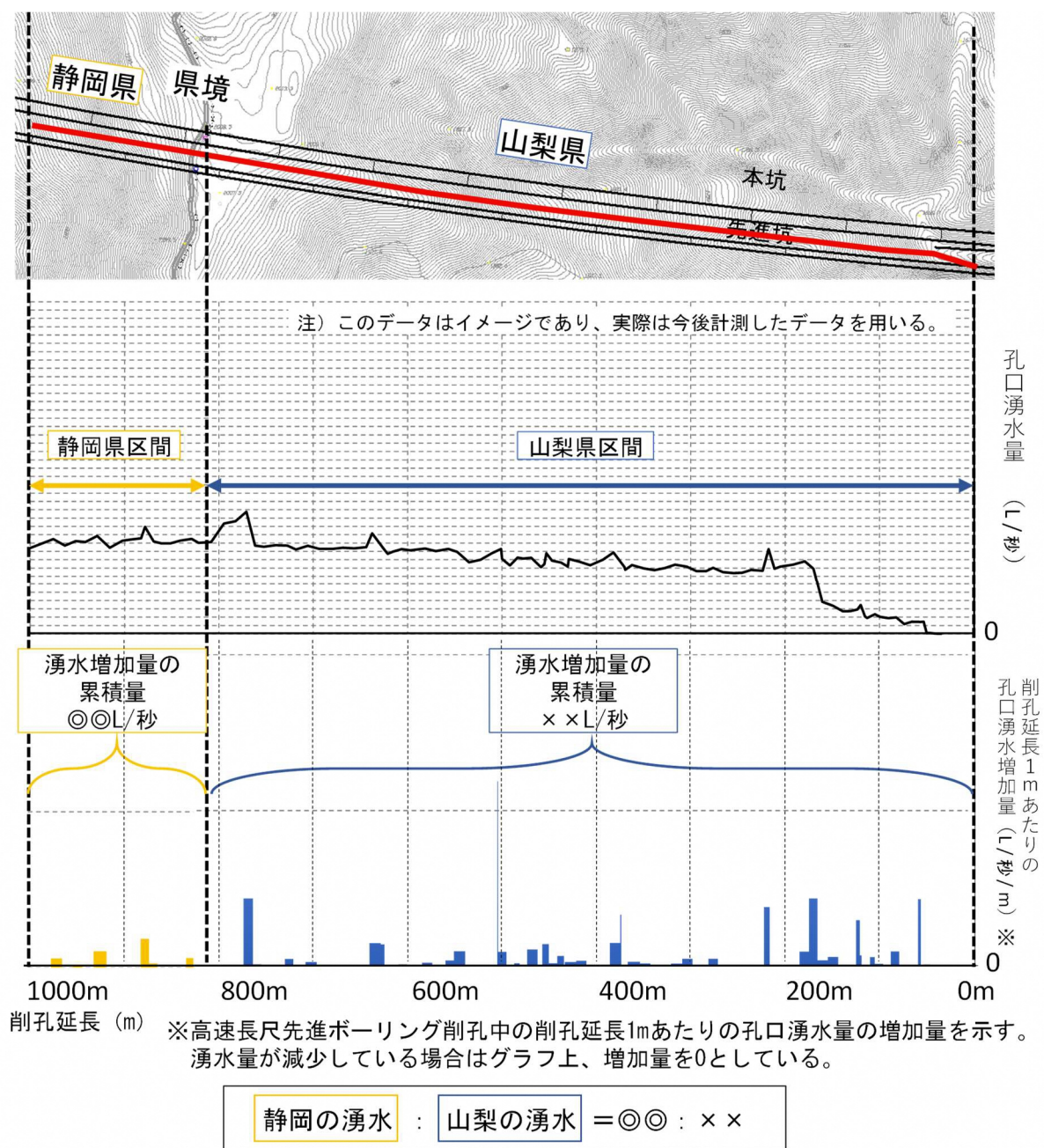


図 16 山梨県内の湧水と静岡県内の湧水の区分のイメージ

【県境付近から実施するボーリング調査】

○調査中

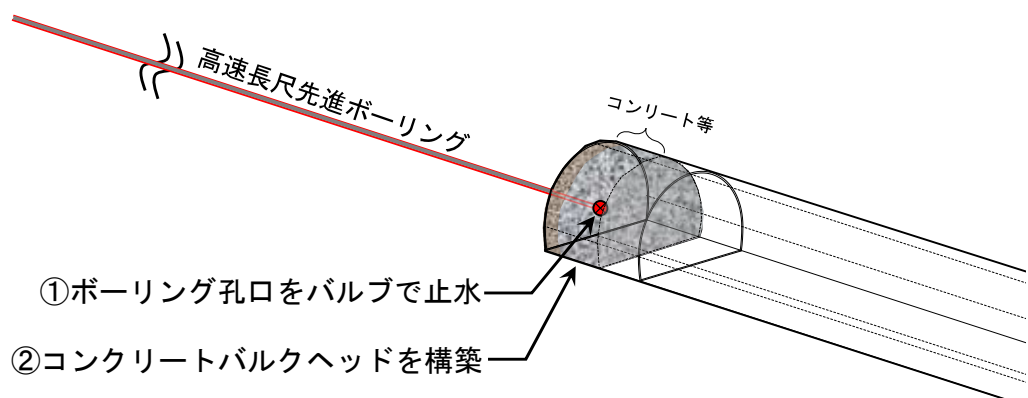
- ・削孔中に生じる静岡県内の湧水について、調査中は、削孔に必要な水をポンプで循環させる必要があることから、湧水は調査後に同量を戻せるよう量を測定したうえで孔口から流します。
- ・調査中は継続的に湧水量を測定します。調査中に湧水量が管理値（10mあたり

0.05 m³/秒) を超える場合は、削孔を中断し対応を検討します。

- ・調査中に流した湧水については、静岡県側に同量の水を戻すこととし、その取扱いについては静岡県等と議論していきます。削孔中に突発湧水が生じた場合はこれまでに実施された工事、例えば青函トンネルなどの事例も参考にしながら、流出を止めるよう措置いたします。

○調査完了後

- ・調査が完了した後は、湧水の流出を防ぐため、孔口付近で止水します。止水の方法としては、高水圧に対応可能な性能を持つバルブの使用や孔口周りの止水処理（セメンチング）の強化や、孔口に近いトンネル自体の構造の高強度化などを考えていますが、このほかにも隔壁（バルクヘッド）などの工事の事例や深地層の研究機関等で研究が進められている方法も参考にしながら、確実な止水の方法を採用してまいります。（図 17）具体的な計画は、実施までの間に専門部会でご報告します。



※上図は実際のトンネル工事の実績等を参考にしたコンクリートバルクヘッドのイメージ例となります。

図 17 隔壁（バルクヘッド）のイメージ

【水資源・生態系への影響について】

- ・これまでも、断層帯に関連する沢においては水資源や生態系のモニタリングを実施してきており、その結果は年度ごとに取りまとめて、静岡県等に報告しています。
- ・今回ボーリングによる水資源や生態系への影響に関するご懸念に配慮し、水資源・生態系の調査を行っている沢において、静岡県内で実施するボーリングの調査中、調査完了後に流量の調査を追加して実施します。
- ・具体的な内容は、県境を越えた調査を行うまでに専門部会でご報告します。

(参考) ボーリング時の湧水量について

- ・当該箇所周辺でこれまでに実施したボーリングの湧水量は、表 3 に示すとおりであり、仮に同程度の湧水量が発生し静岡県側から山梨県側に流れても、静岡県内の地下水に影響を与え、大井川の水資源利用に影響を与える可能性は小さいと考えられます。
- ・しかしながら、地域の皆さまからのご懸念を受け止め、調査完了後に発生する静岡県内の湧水については、同量の水を静岡県側へ戻す、あるいは流出を止めるようにいたします。

表 3 周辺で実施したボーリングの湧水量

既存のボーリング地点		ボーリング長 (m)	完了時湧水量 (m ³ /秒)	井川ダムにおける大井川の 平均流量 ³ に対する割合
山梨県	広河原斜坑①	1,000	0.005	0.01~0.02%
	広河原斜坑②	1,170	0.003	0.01%
	広河原斜坑③	1,100	0.007	0.02~0.03%
	広河原斜坑④	801	0.003	0.01%
	広河原斜坑⑤	851	0.003	0.01%
静岡県	東俣～県境付近 (斜めボーリング)	1,200	0.02	0.04~0.07%

³ 井川ダムにおける大井川の平均流量は約 12 億 m³/年±3 億 m³/年（国土交通省「リニア中央新幹線静岡工区有識者会議」で提示した「大井川水資源利用への影響の回避・低減に向けた取組み」による）。

6) 調査状況の報告

- ・南アルプストンネル山梨工区にて実施する高速長尺先進ボーリングによる調査の状況は、図 18 に示すとおり、山梨県、早川町及び静岡県等に報告します。
- ・調査の着手時に報告を開始します。
- ・基本は、日々のボーリング先端位置及び代表的な地質の状況（試料写真）と孔口湧水量を1週間毎に取り纏め、**山梨県、早川町には山梨西工事事務所より、静岡県等には静岡工事事務所より、翌週中にメール等で報告**します。
- ・管理値を超える湧水が発生した際は、速やかに報告します。
- ・ボーリング先端が県境に到達した際は、その旨を速やかに報告します。
- ・**県境を越えて未調査の約300mについてボーリング調査を進める場合も、報告は同様に行います。**
- ・ボーリングが完了した際には、速やかに報告します。
- ・ボーリング完了後、取得データ、採取した試料及び地質や湧水の評価について取り纏め、報告します。

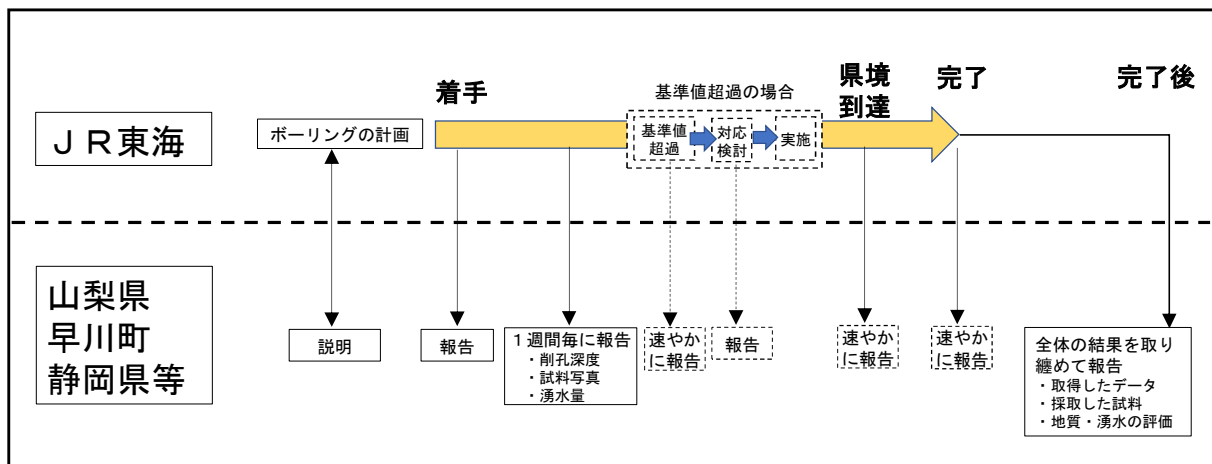


図 18 報告に関する流れ

(2) 先進坑掘削の進め方

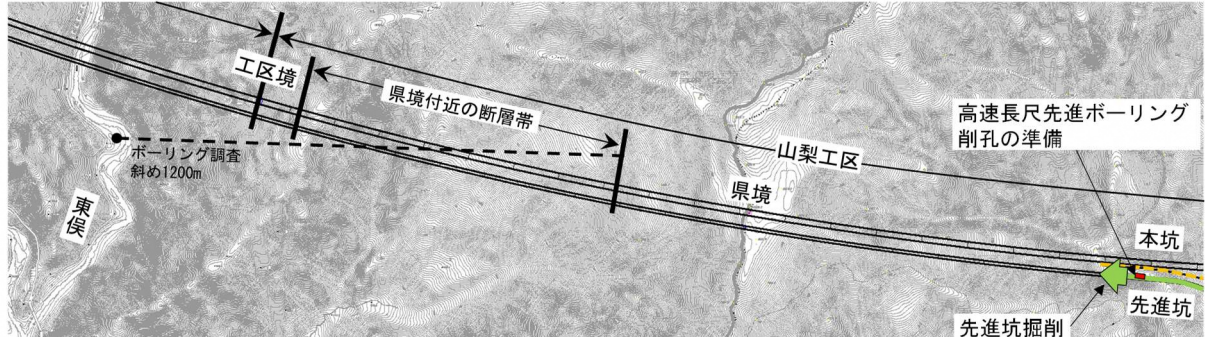
1) 先進坑掘削計画

- ・山梨県内の地質、地下水の調査を目的に実施する高速長尺先進ボーリングにより地質と湧水の状況を把握したところから先進坑を掘削し、山梨・静岡県境の付近まで進めます。
- ・これまでの地質調査結果からは想定していませんが、高速長尺先進ボーリング調査及び先進坑からのコアボーリングなどの追加の地質調査の結果、県境付近に大量の湧水の存在を確認した場合には、山梨県、早川町及び静岡県等に報告するとともに、その手前で先進坑の掘削を一時停止し、必要な調査及び対策を検討・実施します。
- ・県境付近における先進坑の切羽は、高速長尺先進ボーリングで得られるデータ(湧水量・湧水圧の測定を行い、県境付近における岩盤の透水係数を推定します)から、静岡県側から山梨県側に流れる水の量が極めて少なくなるよう県境から一定の離隔を確保した手前の地点で停止します。停止位置の決定にあたっては、先進坑掘削時の地山・湧水の状況についても参考にします。具体的な内容は、専門部会で報告します。

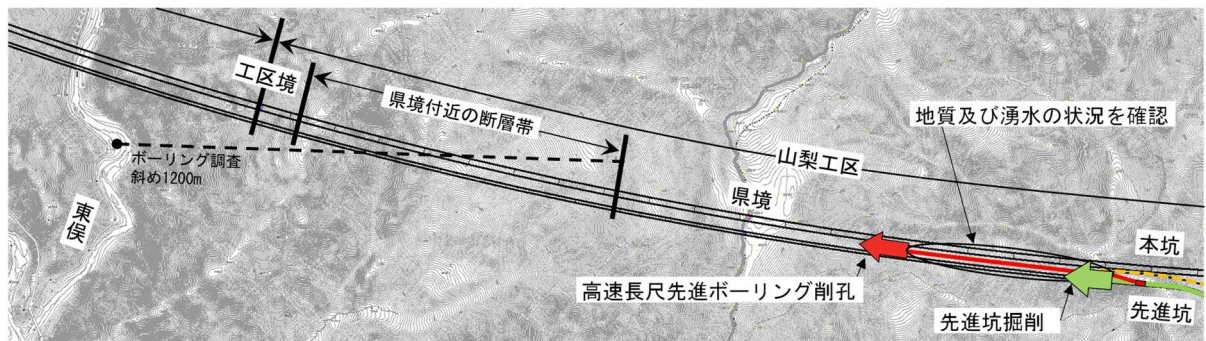
2) 断層帯調査と先進坑掘削手順

・今後の先進坑に関する掘削手順を、断層帯調査を含め、図 19 に示します。

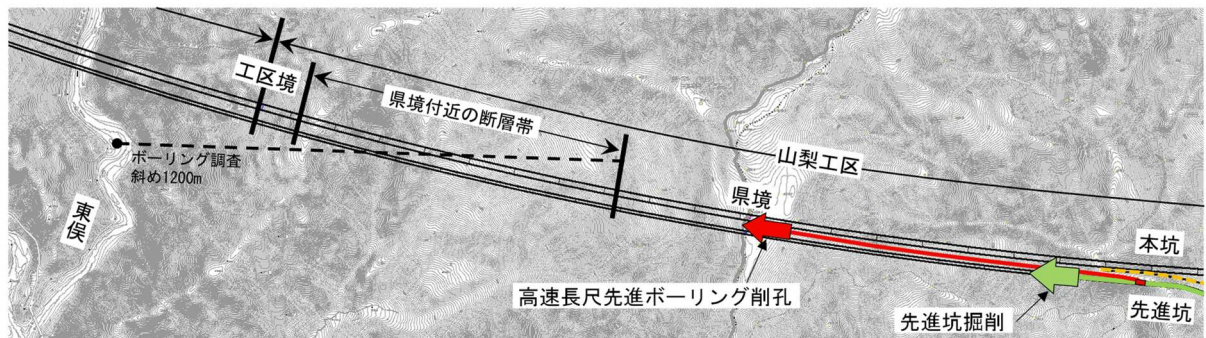
①現在 高速長尺先進ボーリング調査の準備



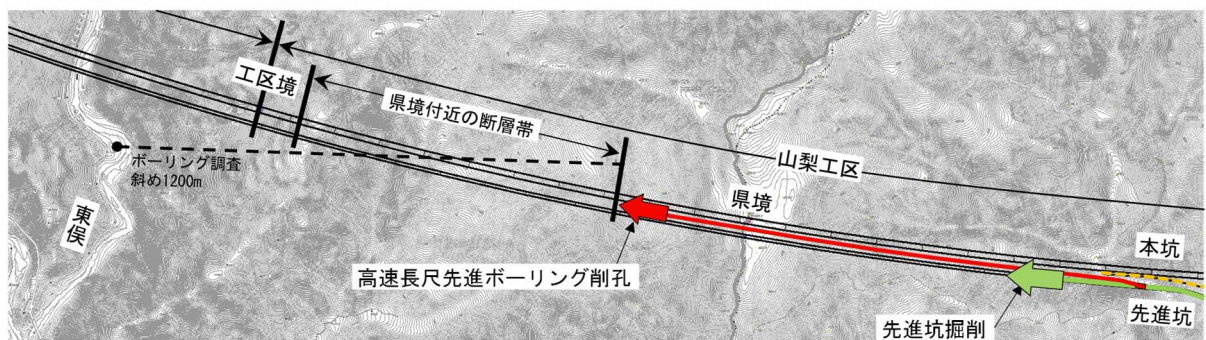
②高速長尺先進ボーリング調査、先進坑を掘削



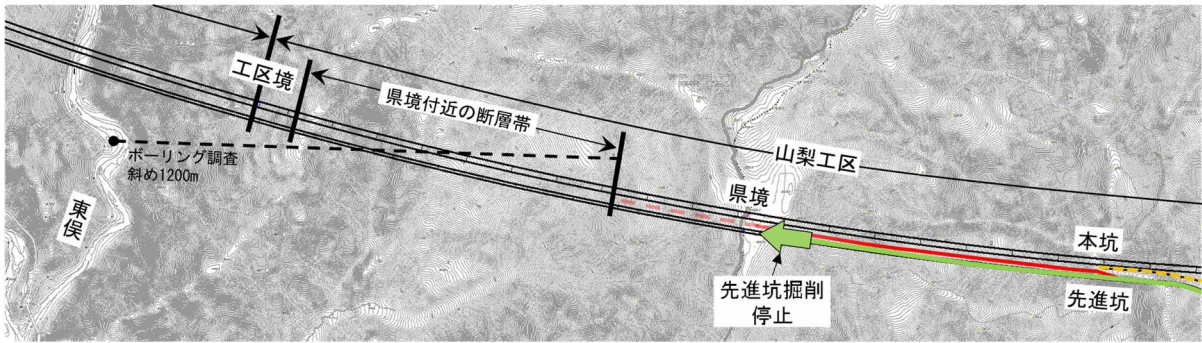
③高速長尺先進ボーリング調査県境到達



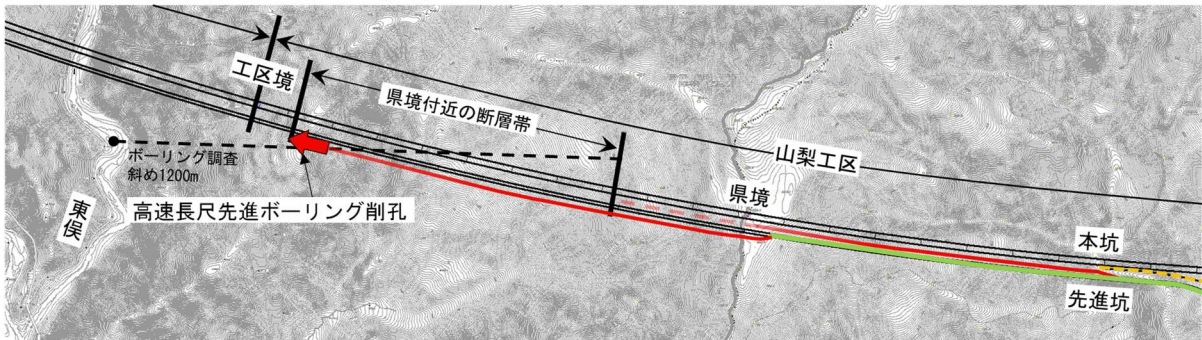
③' 湧水を静岡県側に戻す方法が実施可能になった場合、未調査区間を調査



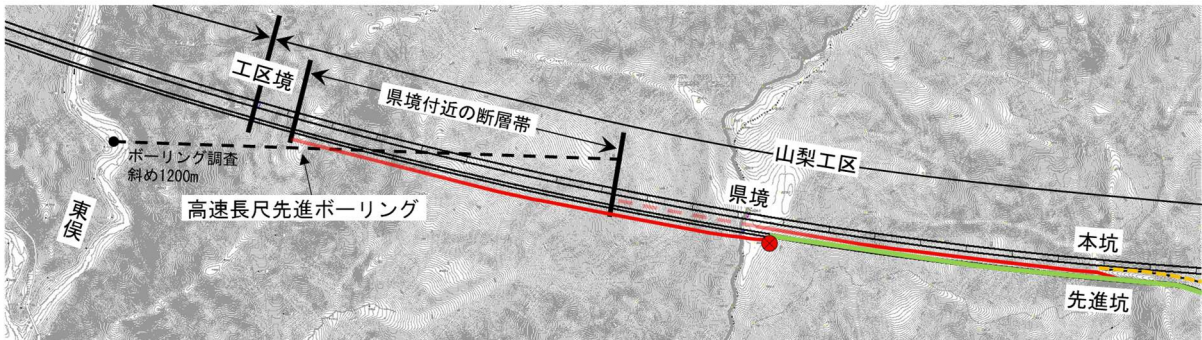
④ 県境手前で先進坑掘削を停止



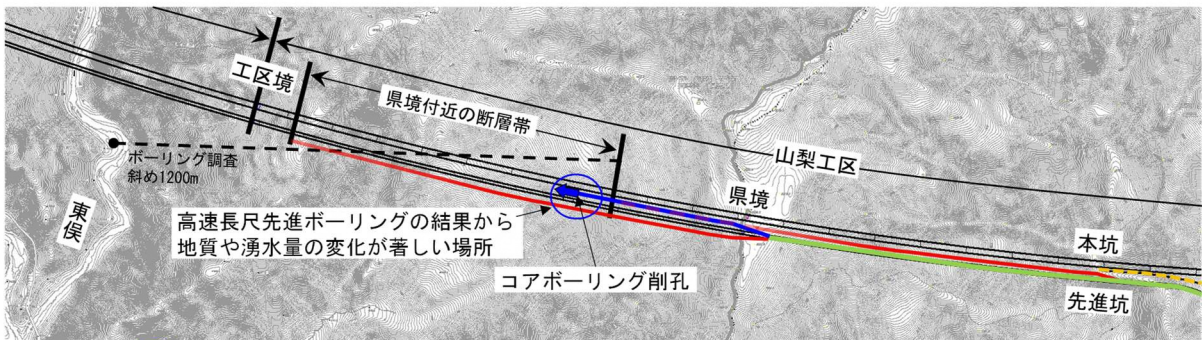
⑤ 先進坑より県境を越えて高速長尺先進ボーリング調査を実施



⑥ 調査完了後高速長尺先進ボーリング孔口を止水



(参考) 追加の地質調査 (コアボーリング) を実施する場合



注) 図上の ○ 「地質や湧水量の変化が著しい場所」は例であり、実際のものではありません

図 19 高速長尺先進ボーリングによる断層帯調査と先進坑掘削手順